

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和六十年八月十五日 発行 (毎月一回・十五日発行)

(通第四三三号)

慈光

第三十七卷 第八号

次 目

63.9.27

消極と積極	近角常観	(1)
『日記抄』七十歳	近角常音	(5)
歌集・九十を越えて	柳瀬留治	(9)
法燈	酒井演幽	(11)
慈光日誌抄	西元宗助	(14)
④『お声で十分』	岩崎成章	(17)
歎異抄に導かれて	花田正夫	(21)

消極と積極

近角常観

親が私共のような乱暴者に着せてやろうとて、手織の着物を下され、他のもの食べられない病人に食べさせようと、お粥をこしらえて下さる。この着物、このお粥をありがたく頂いて、これを着、これを食べておりながらも、心の中では、自分は手織でなくとも着られる、お粥でなくとも食べられると思って居るようでは、まだ親の御真実が解つていないのであります。然し今一步進んで「お前がまだ他の着物が着られると思い、他の食物が食べられると思っているのは誤りである。お前には他のものは着られないではないか、食べられないではないか。もし他のものが着られる位なら、手織の着物はこしらえはせぬ。もし他のものが食べられる位なら、お粥はこしらえはせぬ。手織、お粥以外のすべてのものはお前には駄目なのである。そういうお前があわれであるから、お前に相応した手織、お粥をこしらえてあげたのである」と、この親の御真実を聞かねばならぬ。

人生に立つて大いにやつて行こう、努力奮闘しようといふのは、実に勇ましく聞え、立派にも思われるけれども、人生は到底これでやり通す事は出来ないのであります。私は母親が病気で、久しく看病をしてるのであります。私がどうもはかゞしくない。到底駄目だとなつた時には、ただ暗黒より外はない。私の力でどうしようと思つても致しかたがない。親にかわる事も出来ない。もしこの場合にどうかして自分の念力、行力によつて親の病を助けたいとの心が、凡夫としての思わくに出ようかも知らぬが、然しながらことは絶対に駄目なのである。凡夫から如来への註文、祈禱たるや、實に自分の註文、祈禱であつて、あたかも、子供が菓子が欲しい、美しい着物を着たいというのと同じで、人生を自分の思わく通りにやりたいといふので、それは到底出来ないのである。出来ぬことは絶対に出来ぬのである。事実に於て、どうする事も出来ないのが即ち暗黒なのであります。

然しこの暗黒な人生を説くばかりが仏教かといふに決してそうではない。

如來の作願をたづぬれば 苦惱の有情をすてずして

廻向を首としたまひて 大悲心をば成就せり。

と、その悩みのあらん限り、苦しみのあらん限り、何処何処までも見捨てぬぞとあるのが、南無阿彌陀仏の着物であり、お粥であります。此處に消極と積極との関係があらわれるので、他の着物も着られず、他の食物も食べられないと、いうのは消極であるが、こういうものに、最も相応しいようにと手織を与え、お粥をこしらえられるという親の御真実の積極があるのであります。この積極的大慈大悲を味わねばならぬのであります。仏教以外の教に於ては、「祈れ。これを喜べ。努力せよ」と積極のみを教えられるけれども、人生の事実は消極であるのに、この方面を説かない。然るに仏教に於て、まず此の消極を説くのは、恰も平时に戦時の準備をととのえておくように、人生は畢竟修羅の巷であるのであるから、平生に人生の苦惱暗黒をいふのは、これをあわれみ、同情し給う大悲の御真実を知らざんがために説くのである。いかに消極を説いても積極を説かねば何んにもならぬのであります。かの有名な涅槃經の四句の偈に

とあるのを、弘法大師が和譯して
いろはにほへど ちりぬるを
わがよたれぞ つねならむ
うゐのおくやま けふこえて
あさきゆめみじ ゑひもせず
と詠まれた事は人の知る處であります。処が人生を見て華々しい、幸福な、結構な處であると、人生を染めといふ教えは、未だほんとうの教ではない。然し、色は匂えど散りぬるを、わが世誰ぞ常ならむと、人生の無常有為転変を説くのみで終るのでは、それも未だほんとうではない。これは仏教の半分のみの教で、偈文の前二句ばかりであります。故に後の二句に於て、この無常転変をまりなき人生に對して、無限絶大の大慈大悲を以てあわれみ救い給う如來の御真実を頂けよという事を示されてるのであります。有為の奥山今日越えて、浅き夢見じ、酔いもせずと、此處に信仰に眼醒めるのであります。

人生の永劫のなやみに沈み、地獄は一定住みかの私共に對して、大慈大悲の阿彌陀仏は、こういう私共を何処々々までも見捨てぬぞ、救わねばおかぬぞとの御真実を聞けば、今まで自分の力で、どうしよう、こうしようと力んいた手を離して、ただ如來の御真実に安心させて頂くことが出来るのであります。これは未來の事ばかりについて云うので

はない、現在に於ても、同様であります。現世利益和讃に、

念佛の行者が現生に於て、高大なる御利益をうけるという事を十五首までも詠まれてあるのであります。然しこれらの和讃にも、私の方から仏に祈り、祈願するものは一つもありません。私の一身にしてみれば、病人が幸に多少でもよい方に向つて來たにつけても、これが火宅の御利益を蒙つて居るのだと、中心より感謝する次第であります。また一方愛児を亡くされた人の身にしてみれば、如来の広大なる御利益とは、必ずしも人生に命ながらえることばかりではない、これが利益で、あれが利益でないとの事はないので、火宅無常の世界、煩惱具足の凡夫をあわれみ給う御真実を頂いてみれば、かの雪山童子が四句の偈文を聞かんがために身を捨てたよしに、亡くなつた愛児も、この広大の御真実を頂いてくれよと知らしてくれたものと思えど、ただ何處／＼までもお見捨てない御真実を喜ぶばかりであります。これが他力の大信であり、喜びのあまり称える御名が他力の大行であります。

彌陀の名号となへつゝ　信心まことにうるひとは
憶念の心つねにして　仏恩報するおもひあり

これは和讃の卷頭にあるが、聖人が大行と大信とを明かに示されたものであります。親が与えて下さつた着物だから着なければならぬというのではない。親の御真実を聞いた

てみれば、感謝報恩の思いから南無阿彌陀仏と称えさせて頂くのであります。

親鸞聖人は、単独に信心とのみ仰せられたことはあまりない。いつも真実信心とあつて、自力の信心に對して、他的の信心をかく呼ばれるのであります。如来のおまことの届いた処が真実の信心である。こちらが真実と思うのではありません。むこうの真実がよくわかり、頂けた処が真実の信心であります。

若不生者のちかひゆへ　信樂まことにときいたり

一念慶喜するひとは　往生かならずさだまりぬ
私共は何處までも不実である。如来は何處までも真実である。私共がこの不実を以ていかに向つても、何處／＼までも先方は変らぬというのが真実であります。私共の罪惡深重、火宅無常の人生をあわれみ給う如来の御真実に、こちらの不実が負けてしまい、滅ぼされ、頭が下がるのである。如来はかかる真実の御心より現われ給いしお慈悲のかたまりでましますのであります。御淨土は、真実報土として、如来のおまことより現われたもので、この境界は私共の言葉も心もたえはてたものであります。

葉観　安養淨土の莊嚴は　唯仏與仏の知見なり

究竟せること虚空にして　廣大にして辺際なし

現在只今、如來の広大なる御真実が徹到したところに他

力の大行、大信があるので、未來淨土のみの楽しみではない、現にお慈悲を喜びたのしませていただくのであります。然

しお慈悲を喜んでいましても、此世は火宅無常の世界であり、私共は煩惱具足の凡夫であります。さればこそ、これをあわれみまします広大無辺の御真実からあらわれたる安養の淨土があるので、平生業成と、現在御真実をいただかして貰う事が大切なのであります。

如來の本願は、函蓋相應と、如來の方より私共の根機に相應してお建て下さり、御成就下さつたものであることを、よく／＼味わねばならぬのであります。

(法藏誌、大正七年三月)



法藏誌　極樂淨土圖　²²⁴後集解
× 無爲卷二
化卷三十四
教會後序

攬 教 照 心

「信する者は救はれる」と一般に考えられている。然しその救いは、信する力もない者目當であるのに、自分は何とかすれば信じられると思いこんでいるから、仏様の深い思召しがうけられないものである。

親鸞聖人の「唯信鈔文意」に、「故使如來選要法」というは釈迦如來よろずの善の中より名号をえらびとりて、五獨患時・惡世界・惡衆生・邪見・無信の者に与へたまへるなりと知るべし云々」とある。ここに、私共の邪見無信のこと

をかねて知し召しての名号の御勤めであると知らされる。更に、第十八願の三心釈のところに「無始よりこのかた一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈没し、衆苦輪に繫縛せられて、清淨の信樂なく、法爾として眞実の信樂なし」と示され、「如來、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、乃至一念一剎那も疑蓋まじはること無きに由りてなり。斯の心は即ち如來の大悲心なるが故なり」と云々。如來、苦惱の群生海を悲憐して、無碍広大の淨心を以て、諸有海に廻施したまへり云々」と明示せられ、信する心も、念する心も如來よりたまわる心を教えられるのである。

『日記抄』七十歳

近角常音

昭和二十七年一月一日

六角堂前にて勤行。曇鸞師の讚を頂いて、二種回向のお示しまことに有難かつた。

六月十五日。講話

歎異抄一条第一句は、自分が会得した時の心持にびつたりして忘れられぬ気持などを話す。

然し、「一旦分つてもまた間違い、又間違い」この者を何處までもお呆れない慈悲が、我々に分らせていただく根本原動力である。

常観言「またやりそこない／＼ それだからお呆れない

お慈悲でないか」

六月十八日、某方。人間 故教 修業 P.237

歎異抄第一條を話した。

床に予の書いた「外に賢善精進云々」の文と「世の中に

海女のこころを捨てよかし云々」の歌が掲げてあつたので、人間どちらにころんでも、罪惡深重を免れぬ事を思ひ、こ

そあ蝶口には髪を肩のあら毛を切り換えた

外に「彌陀の本願には老少善惡の人をえらばれず」は我々の善惡の問題は信仰圈外の問題であるという事や、「彌陀の誓願不思議にたすけられてまいらせて往生をば遂ぐるなり」は、我々おちつかなかつた人間が、初めて「彌陀の誓願……」と知らされて、誓願不思議の一つであることに安んぜさせていただきてきた味わいである事等を話す。

七月十二日。講話

聖人の偉大なところが大体話せたようであつた。聖人の常人でましまさぬ有様には、近年いま／＼感を深くする。

七月二十五日。

関東より御帰洛の聖人を想い起した。「年々歳々夢の如し、幻の如し。長安洛陽の栖もあとをとどむるものうしとて云々」

御法抄下丘

聖人はどうしてこのように、どうなりとという態度に出了られたのだろうかなどと思つてゐる中に、これは實際問題として各種の厄難にお遇いになつたものだからと考えた。

八月十三日。

自分の講話はあまりに無準備である故、今後せめて、一枚宛でもよいかから日課として御聖教を拝ませて貰いたいと思つた。

その考にて十二年前使用のノートが無いかと探したのであるが、大困難の末やつと見つけ出して嬉しかつた。先ず教行信証から読まして貰いたいと思う。

八月十四日。

念仏以外にものを要したならば、それは大変である。病院に某夫人を見舞う。兎に角、喜んでいて下されたのは意外であった。全く仏力である。

予は満足の故に病院を辞する時は足の苦痛を忘れていた。

八月十六日。

歎異抄、第二条が真美信心の内容を明示せられた聖教として、真実にて、唯一無二の宝典である。この聖教ましまさずば我等は信心の核心をすつきり知らせていただくことは不可能である。

凡百の宗教が、何處で真信の成立をいただくことが出来る

第三は「もししかば南都北嶺にも……かの人々にもあひたてまつりて云々」

第二は「しかるに念仏よりほかに往生の道をも存知し、法文等をもしりたるらんと心にくく……大きなるあやまりなり」

いよいよ聖人の有り切りが出る。これは聖人、東国在住中も、自分はかつて念仏のほかに説いた覚えはない。説きもならなかつた事ではないか。信心上の物識りがあつて、こうもならなければ面白くない、何かもつと奥にあるであろう。こちらにも我等には何とかしてよくなりたいの思ひがある。「南無阿彌陀仏」何の変哲もない。

第四は「親鸞におきてはただ念佛して弥陀にたすけられまいらすべし」とよき人の仰せを蒙りて信するほかに別の子細なきなり」
「親鸞聖人が吉水の法然上人をたずねられ、日頃の苦しみをのべ給ふ。法然上人、選択本願の念佛の正意を説いて云云（間違わぬから信する）

第五は「念佛はまことに……業にてやはんべるらん、総じても存知せざるなり」

第六は「たとひ法然上人につかされ……後悔すべからず候」

第七「その故は自余の行を……地獄は一定すみか」

聖人関東にてもお勧めになつたのは念佛一道。法然上人があわれて初めて驚かれのは念佛一道。善導大師の四帖疏に「一心に専ら彌陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問わず念々に捨てざれば、是を正定の業と名づく、彼の仏願に順するが故に」。「彼の仏願に順するが故に」の文深く心魂に染み心にとどめたり、とある。

後卷本四五

を話された。南無阿彌陀仏。

私は近頃まことに横着なことなれどもこの歎異抄。

私ごとき者へのこの慈悲……

私はお慈悲に御縁づけられなかつたならば、今頃どうなつて居るやらと思い、それ一つは私の家の事情であります。

横着に聞いて頂いている。御縁がなかつたならば、この横着なことも聞いて頂くことも出来ず、ひとえに仏祖の加護。そこでいつもながら私の御縁を話す。
「ただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべし」これどう頂こう。ただ念佛するものを助けようとの大悲の御約束。念佛するものを助けようと願。努力して念佛せよときこえる。

八月三十一日。講話。

法然上人と親鸞聖人との御関係。

「親鸞におきてはただ念佛して……」

この味わい。それに予の入信関係など話す。

十月二十六日。講話。

歎異抄二条と選択本願。自分が念佛を知らせて貰つた御仮縁。

よいことは全部仏につき、悪いことは全部自分につく。

十一月一日。

2.1.10.

我にしても然り。「あいつのいつまでも我慢のやまぬ、これは困つたものじや、可哀想なものじや」。この兄の言葉に、私は参つてしまつた、頭が下つたのである。今でも種々ある。しかし下つた時の事は何年経つても忘れられぬ。従つて関東の化導はただ大慈大悲の念佛一つ。南無阿彌陀仏。念佛すれば地獄に往かず、淨土に生れるために信ずるのではない。

八月三十日。

嫂から聞いた兄の言葉、「いつまでたつても我慢がやまぬ」これはなか／＼人に理解して貰えぬ、この様な意外の事とは思わなかつた。

この時我慢の内容がまだつかめていたのではない。何か知らぬけれども、我慢がやまぬと、それを気にかけてくれる、その慈悲一つは何はなくとも嬉しかつた、頭が下つた。そのうち初めて我慢の内容が見えて来た。信仰の問題になると誰にも負けぬ信心となる、これ我慢。分らぬはいかぬ／＼、これ我慢。そればかり死ぬまでいう。

聖人帰洛後、関東の同朋がお伺いする。聖人、ありきり

聖人の常の仰せの文。聖人の日常生活。

「ひとへに親鸞一人がためなりけり」

歎異抄奥書の文を一部了解させて貰つた。これは如何に御本意を取違うことの恐しいかを示された文。何故にお慈悲が深いのか、それは極悪を救わねばならぬ故。

十二月五日。

私の気づかせて頂いた時の事を聞いて貰います。

実は私も信心の家に生れながら、如何にしても了解出来ず、最後に、どうでもよいと自棄状態に陥つてゐた。その際に思いがけず、兄がこう云つてゐると嫂から耳にした。

「弟を子供の時から育てたけれど、彼に別に不足はないけれど、いつまでも我慢のやまぬのは困つたもの」と。最初気がついたのは「あれは困つたもの」と気にかけているその事であつた。自分自身が我慢がやまぬので困つた等と思つてもいい、それを気にかける、不思議といい、妙な事だと思った。兎に角親切な事と思い、以来我慢がやまぬという事が忘れられず、この者が立つ瀬がないから見捨てぬという事。以来それに一筋でやつておる。

歌集・九十を越えて

柳瀬留治

卒業記念強調
不禮賞レ

昭和五十五年

音絶えて独りひとりが消えてゆくこの世淋しも南無薩彌陀

陀仏

ややや

昭和五十四年ロウ

八十八の老がつくれるみじか歌清らに瘦せて鶴としもなれ

も八十八めでたきものにいひなしてこの一件を片つけなむ

か

凡そ世はめでたからざれ衆がなすをまねて同じて飲むめ

でたさよ

生きのまにまに洩るる念佛嬉しさの極まりに洩れ悲しき

に洩る

とどこほる心の溝の底砂を流す清水ぞわが念佛は

か

前方に何ぞ吉事のある心地し前にのみ歩む我も犬も猫も

右に走り左に走るこの蟹やいづれを前としうしろとなせる

る

昭和五十六年逝きにける人を悲しみ念佛す後世なしとせば遣り処なからむ

らむ

有難きこの念佛のみ心を知らざる人よあはれいとしも

ふ

来世へと心せかるる夜の目覚まだ娑婆にゐる我に気のつく

く

柳瀬君待っていたよと彼の岸に常音先生待ちて在しき

ふ

しはがれし先生のみ声耳にありて折にふれては聞えてぞ

来る

の聲聽へ見ゆけむ大悲の心量の心

先生は正にみ仏わが業苦とりて負はすに安げくぞ老ゆ

脱ぎ捨てて裸の己詠まざるは偽りなりと責めにたりしが

夜目遠目傘の内という近寄りてよく見ば誰も人は醜し

醜きをかくすと肌に衣を着け化粧なせるかをみな愛しも

法

燈

頬もさへすまほにまきゆるお身ひかりく貞めよき」
歌集
対日暮の内をとて重複りアヨウ泉お贈き人む跡」

武十の山中へと詠つたり

酒井演幽

み仏様のおかげです。

お日様がさし込めばこそ室内の塵が見えます。私の内心の罪悪、見苦しき有様が見えますのは大悲のみ光が私の心中にさし込めばこそです。「松蔭の暗きは月の光かな」という句を味つて下さい。鏡に向わねば我が顔のよごれは見えませぬ。み仏のみ光に遇わねば私の裏面には気付きませぬ。私の見ぐるしい姿の見えて来たのはみ仏様のお照しのたまものです。救われたおかげです。

○
この見苦しい腐った心を除いて救われるのではあります。腐った心、罪悪のかたまりをこそ救つて下さるのです。泥田にこそ蓮の花が咲くのです。油でこそ灯火がとぼるのです。罪惡深重の心なればこそ救いも成立するのです。

闇なくして光の要もなく、泥を離れて蓮も開かず、油なくして燈もともせません。私を離れて大悲のみ仏のみ救いがあり様がないのです。除きたい腐った心の見えたのが、

○
絵像や木像は親様をしのぶお写真であり、お念佛は親様を呼ぶお名前です。先立ちませるお父様を時折り淋しさにお父さま／＼と呼びたくはありませんか。それと同時にお父さんのお写真やお形見を手にとりあげ又拝みたくはありませんか。私は十八年前母を失いました。淋しさ懷しさに時折りお母さんと呼びます。それと同時に母の形見、母のお写真を見たくなりません。同じ様に朝夕南無阿彌陀仏とみ名をより親様のお写真を拝ませて頂くのであります。

○
恋しやとおもふこころはわれならで母のこころのかよひくるなり。

○
その母は子の泣くと笑うとに差別なく、慈愛のこころはへだてなくわが子の上に育つよう生きるよつ常に念じます。

-11-

救いのみ親もまた同じ様に我的喜ぶと悲しむとにかくわりなく、また如来と伴うたのもしき時と、如来を忘れて淋しむ時とその何れを問わず常に我をいつくしみはぐくみます。云々。

私が信仰して救はれるのではありません。常に私の上に、私が如何様にあらうとも、お慈悲をされたもうみ親のみ心を仰がせていただき、信じさせていただくのです。これをお信仰し申します。私が有難うなつて救はれるのでもなく、苦しみ悩みひがみ根性がなくなつて素直になつて救われるのでもありません。有難うもならず、そして淋しみ悲しみ苦しみ、ひがみ悶える私をどこ／＼までも見捨てず、憐みましまして、心配するな一切はおれが知つてゐる。全責任はおれが背負つた、まかせよ、安心せよの限りなきみ恵み深き仏心に救われるのです。

最後まで大悲のみ心に育つて下さい。安心は私がしようとあせらないでも親さまからさせて下されます。
またあなたの「安心ができない」との意味が、お慈悲卒業でもするような意味で安心したいが出来ないとのことでしたら、それは出発点が間違つてゐると思ひます。

○
お慈悲に育まれ、み仏の道を求める内に卒業したり、かたづけたり、仕舞をつけたりすることはあり得ないことを思ひます。

○
お慈悲は無限であり、み親は無量光、無量寿であります。卒業せずかたづけず白道を堅実にまつしぐらに歩んでまいりましょう。求め求めて大悲のみ心に育つてまいります。

○
求めてもまた求めてもとめゆくべき法のみちかな
求めてもまた求めゆくそのままに求められけるすがたとぞおもう

○
御病氣は中々にお苦しいことに候わん、然し日頃は御繁忙のお境遇、病氣という縁によつて暫く慰労休暇を賜つたと思召し心静かに思い深く人生を味わい、お慈悲をかみしめ下され度候。病氣も亦捨てたものにも御座なく候、或る意味に於ては大教訓に御座候。第一には病氣となつて初めて健康の尊とさを知り、働き得る身の幸福を得可申候。第二には病氣となつて自己の力のむなしさ果敢なさを知らされ、人様のおかげ、全く他力のお恵みならでは一刻も過ごされざるこの身なることを思い当り申候。第三には平生、外へのみの心の眼が病氣によつて自己の内へむけられ人生そのものを見届けお慈悲ならでは、大悲の親様ならで

-12-

は、徹底せる落つき、満足、幸福はあり得ないことを知らされ細々でもお念仏させていただかれ申候。

以上ののみにても、世間の練成修養や、三年五年の学校勉強にては得られぬ大勉強に御座候。この意味に於て、病室は道場であり、大学に御座候。また病気は唯一無二の宿題であり、教科書に御座候。病苦は学生の入学試験にも似て経費は学資金にも等しきかと存じ候。病氣に感謝も出来、病氣を縁として家族たがいに感謝しあい一步一歩如来様へ近づかせて頂き候ことが、浄土真実の法味愛樂の仕合せに御座候。徒らに病氣を災難とのみかこち、病氣を不幸とのみ悩み一家全体を悲しく暗くすることは、物質万能の浅はかなる人生觀に御座候。

生 活 断 片

○ 私がありがとうなるのではない。ありがとうなり得ない私を見すて下さらぬ親様のお慈悲がありがたいのだ。

○ 病氣、それは周囲の方々に迷惑をかけ自分にも苦しいことであつたかも知れぬ。然し見失つて過す無限の恵みを味識させて頂き高あがりして見失つていた自己の浅間しい真相、あぶなかしい足どりの自己を静観せしめられ、しみじみと合掌して念仏させて頂いたことはこの上ない有難いことであった。（病床十ヶ月）

親として子孫にのこす遺産、財宝よし、学問よし、地位よし、名譽またよし。されど生死を越えて生きうる力、宗教的信念、これを最上となす。

生も死も業縁のままみ仏のみひかりあほゞゝろやすさよ身である。第十八願、衆生往生の本願に一声の称名をも往往として求めましまさぬみむね仰いで感涙にむせぶり、行業おろそかなりとて疑ふべからず経に乃至一念の文あり、仏語に虚妄なし本願にあやまりあらんや

幾度苦惱の病中に深く繰返し味識させて頂いたことであろう。

慈 光 日 誌 抄

なむあみだぶつ

西 元 宗 助

わたしの家の近くに、京の街に残るめずらしい自然林といわれる紅の森（下鴨神社地域）があります。ここに櫻の大樹などが何本かあって、散歩してそれを仰ぎ眺めるたびに、つくづくと思わせられることがございます。

数百年をへたと思われるこれらの大木は、それこそ大地に毅然として立ち、枝葉をたわわにひろげ、その根を大地の底ふかく四方八方にはりめぐらせてゐる。そのさまは、人々の心を深くとらえ、ひきつけにはおかぬものがあります。まことにこの老樹は、人の目のつかぬ、かくれたるところを、たゆまずこつこつと力めることの大事を、われらに教えていよいよあります。

そう申せば、「根を養えば、樹はおのずから育つ」といふよき言葉があつて、このことはさらに深く人生の真理——道理を、われらに告げ語つてゐるようであります。

あるとき、師は仰せになりました。有難いという気持ち、もしそれが真実であるならば、それは必ず省みて慚愧の念

をともなうものであると。げんに人は、思いがけなく過分のものをいただくと、有難うというだけでは落ち着けなくて、「まことに相済みません」と恐縮する。その反面、すみませんという気持ちがほんとうであれば、感謝の念がおのずからにして生じると。

このように感謝の念の極まるところ慚愧となり、慚愧の極まるところ感恩の情となり、両者はあたかも樹木における幹と根の関係のようにあることが想われて、感銘のいよいよ深いものがあることが感ぜられる。

しかし現実のわたしは、文に書き口にいうほどに、さほど有難いとも相済まぬとも思つていないのでござります。

それどころか、お念仏申してみて、しみじみと思い知らされること、それは忘恩というべきか背恩というべきか、それ以上の、無慚無愧のわが身であることでござります。このようなわが身にとりましては、本願の念仏こそが、わたしこう人間の根幹であり給つことが、切実に思い知らし

められている昨今であります。まことにわれらは、念佛申してはじめて報恩感謝の念をたまわる、慚愧の念をたまわるものであります。まことにわれら煩惱深きものは、本願のお念佛によつて信心の根が養われ、ようやくにして人並の感謝と慚愧の生活を送らせていただけたのでありました。

なむあみだぶつ。

以上は、東京の仏光寺派の西徳寺さんの『えこお』(大谷義博師発行)に、頼よれるままに寄稿させていただいた拙文に、多少修正を加えたものであります。

『慈光』の原稿を、なにをさしおいても先ず書きたい、書かせていただきたいと心焦りながら、期日までに間にあいそつもありませんので、このようにさせていただいた次第でございます。

近ごろ、切に想いますこと。わかりきった当然のことですが、いちばん最初に南無阿彌陀仏とお念佛申されたのは、法藏菩薩にましますということ。一切衆生を助け救わずにはおかんと、ナンマンダブツと大悲招喚せられて今日今時にはいたつてゐるということでございます。

そつ申せば、あるとき高唱念佛のF師が、足利淨円先生

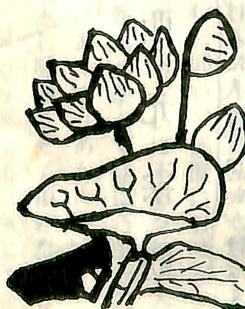
に、貴僧は、それほどお念佛申されませんねと、とがめるように仰せになると、淨円先生、まことに恥ずかしいことでございます。このようなわたしどものために、阿彌陀さまは久遠劫来、常念佛にまします。ありがとうございますと仰せになつて、寂かにお念佛申されたことであります。そのときの感動は今もなお現在のごとくに想われます。甲斐和里子女史の歌に、

み仏を呼ぶわが声は
み仏のわれを呼びますみ声なりけり

また池山榮吉先生は、
よきひとの仰せに聞きて、み名を呼べば

喚ばはせ給ふみ声きこえぬ
と。まことに有難いことの極みであります。

雨のシットシットと降る日、



ついでに云えば、私は去年一月の末、かねて念願していた常陸の国河和田の報恩寺の参詣を遂げ、その数丁先の青麦畑の中なる唯円の道場址を訪い十二首の歌を詠んだ、これも数首を抄しておく。

河和田の唯円と呼び歎異抄つづりし人ぞこの里の人
霜に焼けし杉を目ざして来つれども杉の木下に池よどむ
のみ

念佛の声火を噴きし坊の跡あはれ葉麦の畑中にして
耳の底に留めしみ声にうながされ泣く泣く筆をそめし
一巻

つつましく道場とのみひならし日の所作はただみ名を
讀えき

そこは心字の池がどぶになるまで変わりはてていた。そつ
いえば歎異抄も何百年の長い間うすもれ、表立つた聖典と
しては扱われなかつた。それが明治以後にわかに真価が見
出され、永久のいのちをかちうるに至つた。私はその奇し
き運命をいまさらのように偲びつつ、河和田の地を去り、
稻田の御坊へ向かつたのであつた。

レ
7.9

かゑぎ歎異抄読みゆくなべに上人の鏡の御影おもかげにたつ
はげくれ
ばなめき
はなめき
かゑぎ歎異抄読みゆくなべに上人の鏡の御影おもかげにたつ

『お声で十分』

木村無相師メモより

岩崎成章記

「南無阿ミダ仏」というお声がかゝつただけで沢山なのである。【本願招喚の勅命】がかゝつただけで沢山なのである。西岸上より「汝一心正念にして直ちに来たれ、われよく汝をマモラン、水火の難に墮することをおそれざれ」とお声がかゝつただけで十分なのである。

○信心とは

信心とは照らすものである、我が内心において、わが心のスガタを照らすものである、照らすハラタキである。即ち悪衆生、邪見、無信の者と我れを照らしわが姿をあきらかにするもの、明らかにするハラタキである。これを信心という。

○念佛とは

われらにおける念佛とは、如來の大慈悲のわれらにおける徹到である。末通りであり、いたりどきであり、そこでわれらは称名念佛において、行の一念において、如來の真を聞くのである。称名念佛において如來の真実至心徹到

を体感するのである。報恩のために念佛申すのではない、報恩念佛とはそんなことではない。念佛申すまんまが如來の恩をいたぐるのである。如來の御恩を体感するまんまが、「報恩」なのである。「申す」外に「報恩」があるのでなく「お念佛をいたくまんま」「申すまんま」が報恩なのである。

○帰命と招喚

念佛は大悲招喚のみ声である。その大悲招喚のみ声の外に帰命なしである。大悲招喚のみ声に帰命するのでなく、大悲招喚のみ声が帰命である。

○無疑

「無疑」とは我れ如來を疑わぬにはあらず、如來、我が救濟を疑いたまわぬなり。また如來、衆生を疑いたまわぬ故に如來われに「一念無疑」に眞実信心として廻向あらわれたまうなり。三心は如來の衆生への疑蓋無雜なり、凡夫が如來を疑わないのである心にあらず、如來が我れを疑いだ

まわざるなり。如來の信を無疑といふ。

○歎異抄第五章

業苦の人生を私の不幸のため終えられた父母は「いづれの業苦にしずめりとも」というふしろ姿をもつて私を、「念佛一つ」に引き入れて下さることである。

「南無阿弥陀仏の廻向の恩徳広大不思議にて往相廻向の利益には還相廻向に廻入せり」

○南無阿弥陀仏は十劫正覚の仏体にして名号なり

久遠実成の阿弥陀仏（四字の法）が、法藏菩薩と從果向（阿彌陀）（六字）という「阿彌陀仏」になりたまえるなり。故に南無阿彌陀仏は仏体にして名号なり。名号のまま仏体なり。

ナムアミダブツ
岩崎氏

近藤さんとの問答や、貴方御自身の受得の心を拝読しましたが、正直のところ私いろんな所謂妙好人のことばは余り読みません。やれ清沢師がどうの、多田師がどうの、曾我師、安田がどうのと、そんなことはどうでもよい歎異抄の結文、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろ

づのことそらごとたわごとまことあることなしでないか、ただ念佛のみぞまことておわします。念佛以外は皆魔事なり」わずらわしきります。あちらこちらと自分の心を乱しきる。たしか蓮院師が明信寺をたずねられた時、「つぎ足して、一念往生の本願は無常迅速の機にて、いさかつき木台も持たぬ者がお目あてなり、若し左様でなくば洩れておちて行くほかあるまい」と。

凡夫の思いはすべて魔事、親鸞におきてはただ念佛せよの勅命は、だから念佛のみぞまことにおわしますと仰せられてゐるでないか、今の大谷派は西派の三業惑亂に比すべき根本安心がまちがつてゐる。

親鸞におきてはただ念佛にならん、あなたのとりようは色々な妙好人の時にふれ折りにふれて、あなたの質問に答えられているようだが、受ける貴方がそんな風になりたい心を捨てて、ただ念佛のみぞまことにおわしますと落居すること、それ以外にない。そんな末のことをあゝだこうだと取り上げて感心するより、江州大浜の老婆いわく、この婆々は一生涯、信心がえたい／＼と願いましたれど、信心

与えると、この婆々は怪我すると恩召し、とう／＼今日まで、信心与えて下さらなんだ、まるきり助けられねば参られぬ婆々であつたと、お助けに逢わせてもらいましたとある。貴方は仰せの言葉を使っておられるが、又わかつてい

られるつもりだが、ただ称えよの如来の勅命、大悲招喚の勅命のまんまとただ称えるだけのことたりる。なんであの人がこう言つたとか、どうとかと吹聴せねばならぬか。そういう私の語も「糞」のかたまりである。毎日の人的関係やいやなことの連続、自分も勝手なことをやる。この生活の上に、この「糞」の上に走り廻されつゝも仰せより外ない、不安ながら安堵している。それより外にいる。誰がなんと言おうと嘘だらけの中にただ念佛より外なし、時おりの思い付き念佛で大満足です。近藤さんが何といおうと如來の仰せとなればしてみようもない。念佛は行者のために非行非善なり、ひとえに他力にて自力を離れたる故に、念佛は行者のために非行非善なり、この濁惡の口にたえて思ひ付きで出てくださる、これがありがたい、これ以上の満足があるうが。

たずね歩かず家にかえりて念佛せよと申された香樹院のおことばにかえつて頂きたい。どれだけ近藤氏に帰依しても同人にはなれまい、貴方は貴方である。無相師は谷内ばかりに「日常生活の上にお念佛の声をきき、お念佛にしみじみとおしらせを頂き日暮しましよう」と書き送つておられる、甚だまとまらんことを申し上げてすみません。

ナムアミダブツ 五聲ナムアミダブツ 岩崎拝

2.8.9.

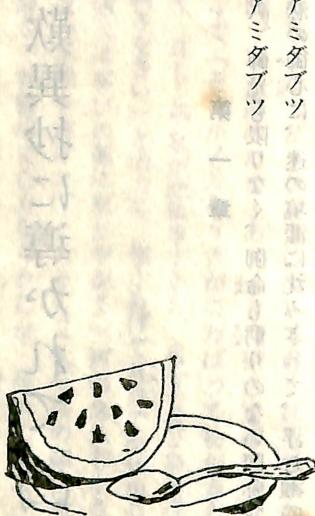
ナムアミダブツ
無相師の昭和五十八年七月の御便りに、もうそろ長くはご法談相手も出来ないと思うので、名残り惜しく思つております。私のお聖教は「歎異抄」だけで充分であります。それはもちろん、聖人のやさしいものは、拝読させていただきますが、「歎異抄」にあらわれた唯円房に体感された聖人のお言葉で十分であります。その「中心」は第二条の、イノチガケで求むべきは「往生極樂の道」「生死出離之道」であり、その往生極樂の道（生死出離之道）はただ念佛じての「よき人の仰せ」そして、よき人の仰せの「ただ念佛」のホカありません。それは「ただ念佛のみぞマコトにておはします」であるからです。

「お正信偈」でいたぐと、極重惡人、唯称仏、聖人のお言葉では、念佛成仏これ真宗、このホカはありません。私としては、ナム、ナム、ナム、ナム、とありました。去る十八日福井大学より御骨となつて帰えつて参られ、オイになられる方が川越に住んでおられ、只今私の寺におあづかりして、八月頃に故郷の鹿児島に持つて帰られます。お骨になつてまで、私の胸にだかれて下さるとは、何とした御縁の深さと唯々お念佛のみです。

さて、御返書のことですが、誰がああ言つた、あの本にこう書いてある、ああ書いてあると枚挙にいとまなし、よろずのことそらごとたわごと頂いて、無相師の、念佛一

つまことにておわします。それで万事解決、何事も時節到来、性分で説明がしたくて仕方のない身には、たとえ未信であろうと、已信であろうと、こうなろう、あ、なろうと、そのままの仰せより手のほどこし様なし、そこへ腹がすわつたら、となえよとも忘れ通して申しわけもない、忘れ通しのチギレ／＼の念佛をよう出て下さいましたとお礼申すより、凡夫の身になり、ワリキレンマンマ、ワカローとして、ワカラシマンマ、何と不思議なお助けではないか。

門前の掲示に「念佛は親様なりき五月雨」と出させていただきました。
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ



第一章

新刊紹介

続・念佛詩抄

木村無相著

発行所 京都市下京区花屋町通西洞院西入

定価 永田文昌堂
一、三〇〇円

振替 京都二十九三六番
電話 ○七五—三七一—六六五一

念佛詩抄は、昭和四十六年と四十七年の二ヶ年間に生れ

たもので、昭和五十九年に七版が出ました。

今回、無相師が亡くなられて、各地の方々の要望に応えて、文昌堂から続篇を出版して下さいました。

無相師の詩を「慈光誌」にいただいておりましたので、誌友の方々はよく御存じだと思います。昭和の妙好人と申すべき人であります。川崎市の岩崎成章先生がありし日の無相さんの法語を統いて慈光にいただいております。皆様にお勧め申し上げます。

花田正夫

歎異抄に導かれて(二)

花田正夫

第一章

(意訳) 御光も限りなく、御命も窮りのない阿弥陀仏が、大慈大悲の御心に、迷の境涯に沈みきつて、浮む瀬のない私共を救つてやりたいという願をおこされ、若しこの願がかなはなければ、自分もまた仏とはなるまい、とお誓いになられたその誓願の不思議な御力で、御淨土へまいらせていただけのだといただいて少しも疑うところなく、あたりがたい南無阿弥陀仏と称えましょと心のうちにおもいたつと、まだその声が口に出ない間に、はやもう光明の中に攝め取つて、否でも應でも見捨てたまわぬ利益にあすからしてくださるのである。

阿弥陀仏の本願には、老人ワガモであろうが、少年であろうが善人であろうが、悪人であろうが、そんなことにはかわらせられない。たゞ心に疑いなくいたくという信心一つが肝要なのである。それはそのはず、もとより罪惡深く煩惱のさかんな私共をたすけたいばかりにたてて下さった本ホダイ

願であるのだもの。

して見ればこの本願を信じさえすれば、他の善いことも入用はない、念佛の御力に勝る善いことはないのである。またどのような悪いことも、おそれるに及ばない、この本願の障害となるほどの悪いこともないのだから、と聖人はおおせになりました。

(意訳・歎異抄 池山先生訳)

仏典を開くと、名号不思議、仏智不思議、誓願不思議と、いうように、不思議と云われるのは、仏の絶対のまことは相対差別の心しかない私共には思議をこえていて、単なる不可解ではない。その仏のまことは、私共の心の如何にかわらず常にそそいで下さるので、やがて疑えなくなり、不思議だなあと、随喜申すようになるのである。

たすけられる、とは、淨土にまいらせていただき、そこ

に、悪縁も、悪の名さえもない世界に導き入れられて、麻中の蓬は直ぐい道理で、曲るのを性とした煩惱具足の身も自然に成仏させて下さるのである。

ここで仏の救済は、單なる罪の許しではなく、凡夫を成仏させていたたくのであることに注目せしめられる。

次に、仏のお誓願の御力によつておたすけ下さるといだいて、まだお念佛が目に出ない刹那に、もはや攝め取つてお見捨てのない利益にあづからして下さるとあるが、短命の者をもおもらしにならない周到なめぐみである。これについて、近角先生のお話に、不幸にも狂人となつた人が宿業でたとへぼけても狂うてもたがへたまはぬ弥陀の約束と詠じられたのも、身にしむことである。

卷三一 大平年
花田正夫著
叢書用集

「信心を要とす」とあるが、蓮如上人の仰言るよう、「信心といふ字はまことのこころと読めるなり。まことのこころと読むうえは凡夫の迷心にあらず、全く仏心なり、この仏心を凡夫にさすけたまふ時信心とはいはるるなり」

で、我々には信する力もない、教行信証の信樂觀に「然るに無始より已來、一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈没し、衆苦輪に繫縛せられて、清淨の信樂無く、法爾として真実の信樂無し云々」とある。弥陀仏の御苦勞は、この信する心も無い者を目標として下さるので、やがて点滴が岩をも穿つ様に、疑えなくして下さるのである。

私が岡山医大でお世話を頂いた田中學長が、御晩年に手紙を下さり「自分は賀川牧師に導かれて四十年来キリスト教を奉してきたが、聖書にある祈りが言葉は云えても心から云えないでの行き詰っていたが、親鸞聖人の教により、この祈り得ぬ者をお見捨てのない仏の大悲心を聞き、始めて心がひらけた」とお喜びの手紙を頂いて私も隨喜申し上げたことであった。国木田独歩は臨終に「眞に祈り得ぬ者病みつかれ御名一声も称へえず弘誓のみむねいよよ尊し

て見る所、本願を信じれば、他の善いことも入用はない、念佛の御力に勝る善いことはないのである。またどのような悪いことも、おそれるに及ばない、この本願の障害となるほどの悪いこともないのだから、と聖人はおおせになりました。

を救うて下さる宗教家は無いのか！」と号泣して息が絶えたとあることも思い併せられた。

○「弥陀の本願には老少善惡の人をえらばれず」とある。この一句は私が始めて拝読して驚いた事である。相対差別の是非善惡の心しかない世の中で、こうした眞実平等の心はあると思えないで、これは聖人の理想の言葉であろうと思つた。然し、眞実を顕わすことを生命とする聖人が単なる理想を説かれる筈はないと思いかえし、やがて月光が輝くのは太陽の光線の照り返しであつたと気づき、聖人が仏の絶対平等心を身に頂かれての仰せであつたと大きく頷かされたことであつた。

○次に、このへだてない大悲は、私共がへだて心が根強く抜き難いことを憐れまれてのみ心であつたと、且つ慚愧しあつ感謝申すようになった。

さて、「その故は、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします」ここが、本願のおこる根本である。善人、智者を救わんがためではない。聖者や善凡夫は本願からは傍機であつて、浮かぶ縁のない悪人愚人が正機であると示されたのである。

○ここに、罪惡深重、煩惱熾盛の衆生こそ我なりと照し出

なし、本願をさまたぐる程の悪なきが故に」と結ばれている。近角先生は「我々が自分の善をダイヤモンドの様に思ひ、惡を猛虎のよう怖れるが、仏陀の光明にあうと、偽せのガラス玉と知れ、張り子の虎と知らされる」とこここのところを味つて居られた。太陽が出ると、提灯は無用となるように、善惡の一切が自然に解消するのである。ここを本抄の十三条に「さればよきことも悪しきことも業報にしまかせて、ひとへに本願を仰ぎまゐらすべし」と御述べ下さっている。古歌にも

よしあしの中を流るる阿弥陀川 よしあしたえてかかる瀬もなし

とある。

○本章について忘れ得ない人に、死刑囚の山田憲がある。彼は東大卒で農林省の役人であったが、高利貸の鈴、ベンを殺し、死体を行李につめて沿に投じていたのが発覚して処刑されたが、入所中に歎異抄を勧められ、この章の「罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願」とあるところに、我とわが身にあきれる大惡の身に救いの御手をさしのべて下さるとは！ といだき、更に「惡をもおそれなし、本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえに」のところに感泣し、爾來聞い憂鬱の心も晴れ、念佛懺悔の人となつた。

されるのである。宗教は、自分と仏とのさし向いである。衆生と仏の関係を傍観することではない。又「鏡は鏡自身を写し得ない様に、如何なる智者も身辺三尺は暗闇である」と仏は説かれている。自己反省によつて部分的一時的な自己の片影は見え後悔がつきまとつが、三世にわたる、全體の自分は見えない。それを見て下さるのは仏おひとりである。而も愛は理解からと俚言にもあるが、かねてしろし召す弥陀仏が、そこに大悲の本願を建立下さつたのである。

池山先生は「線路上に匐い出た幼児、石を拾うて遊んでいるが電車が近づいていても恐ろしさを知らぬから平氣で居るのを見たら、誰から頼まれなくとも、救い出さずには居られない。まして眞実のさとりの智慧を持たれた仏は我々の是非善惡と五分五分の世界に流転しているのをどうして御見捨てにならうか？」と仰言つて念佛して居られた。聖徳太子は「如來に調伏せられて如來に帰依し、法の津沢を得て信樂の心を生ず」と説かれて、而も「如來は常に不請之友となる」と、私共が請めぬのに、仏はよき友となつて下さると悦ばれている。

以上皆、仏のお一人働きによつて救済せられることをお教え下さるのである。

○「善もほしからず、念佛にまさるべき善なし、惡をも畏れ指差したとのことであつた。

然し彼の最後の公判の前に、弁護士から「君はすべての罪を承認しているので、弁護の手懸りもない。今度は最後だから罪を否認せよ」と勧められた時、前言をひるがえして、罪を否認した。今迄彼に感心していた人達も、呆れてしまつた。これを聞いて担当の教悔師が走せつけると、彼は涙ながらに「もしも助かるかと思って嘘言を申しました」と慚愧し、素直に刑をうけたと伝えられる。

これによつて、信眼は開かれながら、煩惱具足の身のかなしさに、縁にふれると迷い心がおこる、臨終までやりそこのやまぬ身と省みさせられ、凡夫往生の自道を渴仰申すばかりである。

裏を見せ、表を見せて散る紅葉。

あ

と

か

き

三伏の夏となりました。河遊びをした子供の頃をなつかしく心に浮かべております。ただ皆様の御清安を祈念申上げております。

近角先生の御原稿は、弥陀仏の本願の意趣をお述べ下さいました。「手織の着物」のお話は御生涯いつも繰り返して讀仰されました。御本願のよって起こされた御目當、そこに私共の実際の姿が知らされますことあります。

近角常音先生の御忌月がまいりましたので、先生の信仰日記抄を頂き、その信徳に浴させていただきました。求道会館で先生のお書きをうけられました方々も尠くなりましたが、常観先生と表裏一体になられてともしうを広く掲げていただきました。

柳瀬先生は、特に両先生に御縁の深い方で、御歳も九十年を越えられて、歌作と園長の仕事を続けていられます。文字通り一期一会のお生活、御長寿をおよろこび申すと共に、ながく御導き下さいますよう念じております。

酒井演幽師は白杵祖山師に師事された真摯な求道者でありました。九州方面で法燈を高く掲げて下さいました。御

晩年は腎臓病中に病を師とした信味を述べられました。

西元先生の日誌抄は、到る所、あらゆる人々を縁とされて善財童子の求道物語を地に刻して下さいます。蓬戸不出の私の眼を開いて頂いています。吉野秀雄氏の讀仰文は西元先生のお願いにより再び掲げました。

岩崎成章師は、木村無相師にめぐりあわれましたことを深く隨喜し、無相師の信味を紹介し続けて頂いております。くりかえして御味読下さいますようになります。

歎異抄は読めば読むほど、新らしく気づかされる不思議な書であります。八十二が近くなつて、改めて慚愧と感謝の心から誌させていただきます。

八月は例年通り、例会を休ませていただきます。九月の涼風を待つてお目にかかります、御諒承下さいますようになります。

定価	半年	八〇〇円(送共)	愛知県西加茂郡三好町大字福谷
一年	一六〇〇円(送共)	印刷人	坂部光雄
編集・発行人	花田正夫	発行所	名古屋市南区蛭上一丁目廿二番
電話	八二二局七〇三七番	振替口座	名古屋六二二四七番
郵便番号	四五七		